



長良川と私

和田 吉弘

『長良川の生物』(1957年)の序に同書の編集委員長であり、後に木曾三川河口資源調査団団長であった恩師小泉清明先生は「日本に一つぐらいいは天然のままの川が残っていてもよい。歴史を反映し、すぐれた科学研究の舞台でもあり、大きな生産力を持ち、観光の川でもあり長良川には十分“文化河川”の資格があり…」と高い評価をされている。

白帆に風を受け、川を遡っていく六隻の鶺鴒舟。川の水で茶をいれ、アユ雑炊を振舞ってくれた漁師、竿の先に絹たもをつけ、箱めがねをのぞきながら、藻を喰むヒガイを追い、川底を這うアジメドジョウやドンコすくいに興じた遠い日々。自転車と乗合バスと越美南線(現長良川鉄道)を乗りつぎ、一升瓶をリュックに源流から河口までの水質調査。何千回もカメラのファインダーをのぞきシャッターを押した。ウェットスーツに水中めがねでアユ、アマゴ、ウグイ、オイカワの姿を追った。大網を引き、投網を打ち、手網を張り、登り落ちも仕掛けた。トビケラ、カゲロウ、カワゲラ、ドROMシ、ヤゴを採り、河底の石を拾い藻類を削った。長良川は私を育ててくれた川であり、研究に教育にその場を提供してくれた川である。

この長良川に治水と利水を目的に河口堰を建設する計画を知ったのは、もう20数年前のことである。建設省の役人が研究室に来られ、計画を説明し、調査を依頼された。長良川の現況を知り、影響を予測し、その対応を提言して欲しいというのである。とても恥ずかしいことであるが私には聞く耳がなかった。感情が前にでて冷静に判断する理性など全く働かなかった。

「なんで大洪水を防ぐのに、川の出口にそれを

さえぎる堰を作ることが治水になるのか」、「なんでわざわざ木曾川や揖斐川に橋を架けて長良の水を持っていかねばならぬのか」、「河口から源流近くまで天然アユが遡上できる河川が破壊されてしまうではないか」と頭に血が昇って説明なぞ空々しく聞こえてしまったのである。

経済の進展と人間の命は比較の対象にならないにもかかわらず、その調和をうたった、かつての公害対策基本法の姿勢が気になった。しかし建設省の方の執拗な説明と「天下の名川長良川であればこそ、充分な調査を実施し、対応については日本のモデルとして、理想的なものにしたい」との姿勢に動かされ、ともかく本学から信州大学に移られた小泉清明先生に御相談くださるようお話し、帰っていただいた。

現在、自然がよく保たれた河川として高く評価されている長良川も、宝暦治水をはじめ明治改修と治水のために改変が加えられてきた。岐阜市内にある長良橋から下流部の右岸堤に記念碑が見える。私が中学生の頃、この碑の裏側に花崗岩に刻まれたかつての長良川をみた。河道は幾筋にも分岐し、現在の長良川との違いに驚いたことを記憶している。治水と利水との必然性が的確であれば、先人達が生命財産を守るために長良川という自然に手を加え利用したように、河口堰事業を進めなければならない。事業による影響を予測し対策を考え、実行することこそ自然の保護につながるのではないだろうか。自然の利用と保護を対立的にみるのではなく、一対と考えるべきである。そして新しい長良川の自然を創造していくことが現代に生きる私達の使命であると考えようになった。

(岐阜大学教授)

葉脈標本の作り方と活用について

奥村好次

1982年から、ふるさとの自然を見直すことをテーマにした講座を毎年夏に開いている。自然にじかに触れることで、その大切さ重要さを理解させることに主眼を置いて開催してきた。

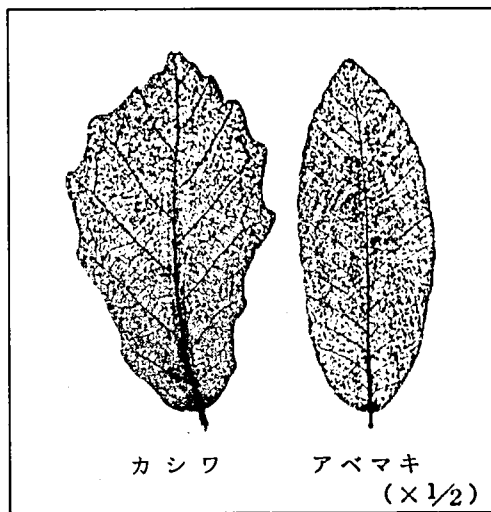
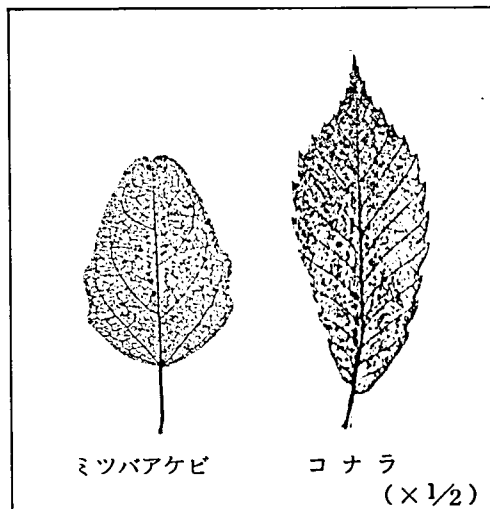
1989年からは、このことにも配慮しながら植物化石を調べるには何が必要かを考えて、現生の植物の特徴を知るために、葉の観察を中心とした講座に変えてみた。収集した葉を使って葉の形・葉先や葉脚の形・葉の縁の切れこみ・葉脈の走り方などを調べ、更に葉脈標本にして詳しく調べた。結果は受講生には好評で、きれいな標本に仕上げで大満足であった。

そこで、今回は葉脈標本の作り方とその活用法について述べてみたい。標本の作り方はいたって簡単で、サンプルとなる葉は、堅くて葉脈がしっかりしたものがよく、裸子植物・シダ植物・被子植物の単子葉植物は適さない。また、被子植物でも、草木はほとんど標本にならないのでできる種類は限定される。作り方は、水酸化ナトリウム(NaOH)の20%溶液に葉を入れしばらく煮る。液の色が黒ずんで来たら取り出して水洗いする。(標本によっては、すぐばらばらになるものもあるのであらかじめ同種の葉を何

枚か取っておく)その後、ガラス板にのせ、できるだけ軟かい歯ブラシで葉の表面を軽くたんねんにたたいて葉肉を取る。葉脈だけになったら水洗し漂白液につけ、その後よく水洗してから水分を取る。インクなどで赤や黒に染色してから乾燥させ、最後にケント紙か固めの粘着紙に丁寧に貼り、上面にブックカバー用のフィルムを貼る。注意することは、あせらずじっくり時間をかけて作業をすることである。

さて、この標本の活用法であるが、当館では資料を蓄積中で現段階では不確定な要素が多いが、特別展の展示に活用した経験から考えると、化石の中で全体の形がはっきりと認識できない標本などに化石と同種とまではいかないが、それと近い種を押葉標本と共用して展示する。そうすれば葉脈が浮きあがって鮮明にみえることなどから化石の全体像もよく分かり展示効果も増すのではないかと考えられる。今後は、瑞浪層群中から産する植物化石の近似種を押葉標本と共に積極的に収集し、瑞浪層群だけでなく、中新世の植物化石研究にも活用できるようにしたいと考えている。

(瑞浪市化石博物館学芸員)



結核の歴史をふりかえって

野尻佳与子

内藤記念くすり博物館では11月2日から来年2月28日まで特別展『結核』を開催している。そこで結核展開催にあたり、結核の歴史的事項をここにまとめた。

結核症は古代から人類を苦しめた病気といえる。結核の歴史を語る際、いつも最初に出てくるのは、エジプトのミイラ、ツタンカーメンの脊椎カリエスである。しかし実は、もっと前にさかのぼって、ハイデルベルグの原人の化石にも骨結核病変のこん跡はみられる。

では、わが国にはいつごろから結核があったのだろうか。古墳時代に発掘された骨の病理学的研究は少なく、有史以前の結核については知る由もない。最も古い事例は平泉の藤原氏第三代秀衡にみられる。秀衡は65歳で死亡しているが、ミイラのX線像により、骨結核であると考えられている。

平安朝(794～1192年)になっても、庶民の結核状況はつかみ難い。しかし当時の上流社会を描いた小説『源氏物語』に結核らしい人々が多く登場している。まず、最初に登場する「桐壺」は身体が弱く、光源氏を出産後、2年たって病床に伏し死亡している。また、「紫の上」は、44歳で死亡するのであるが、どこが悪いところも見えず次第に衰弱していくあたりが結核だとする説もある。

歴史上の人物では、堀河天皇、二条天皇なども結核により死亡していると思われる。堀河天皇の場合、28歳の頃から咳病、風病による不調が頻繁に起こり、発熱が続き、29歳で死亡した。また、二条天皇の場合は伝屍病てんし(古代中国で用いられた結核症の別名)であるが、この病気の治療に優れた者をひそかに招いて治療を受けたという話が残っている。天皇家ばかり出てきておそ畏れ多いが、庶民の情報は残っていない。

江戸時代になると、江戸本郷本妙寺を火元とする大火事にまつわる因縁話が残っている。この火事は振袖火事と名づけられている。これには次のような話がある。商家の娘が、結核で死亡した。そこで娘の愛用した振袖を棺にかぶせ

て本妙寺に納めた。1回忌に親達が寺に参ると、同じ振袖を棺にかぶせた葬式に出会った。寺は先の振袖を古着屋に売却、これを買って愛用した娘が結核で死んだのであった。この古着は再び古着屋を経て第3の娘の着用となり、この娘も1年後に結核で死亡し、同じ日、同じ寺に埋葬された。そこで3人の親達は振袖を焼却しようとしたのであるが、火のついた振袖は、折からの風で舞い上がり、お寺の屋根に燃え移り、大火事の火元となった。結核が感染する病気だと分からなかった時代に、振袖を通して病気が広がり、ついには火事を引き起こしてしまうという話である。

一方、同じ17世紀、イタリアやスペインでは既に、結核は伝染病と考えられていた。患者を診断した医師には届け出の義務が課せられ、患者によって汚染された衣服や家具は焼却し、居室の壁は塗りなおせという法律すら制定されていたのである。

その後日本では、明治時代に入ると繊維工業の発達と共に、結核死亡率が急激な上昇傾向を示した。これは軽工業の苛酷な労働条件、酷い衛生環境のため、女工を含む作業員から結核患者が多く現れることになったのである。

こうした時代が昭和初期まで続き、ようやく第二次世界大戦終了後、化学療法薬ストレプトマイシンが登場した。その後、次々と新しい抗結核薬が登場し、結核は急速に減少した。

しかし、ここ数年日本では、結核の集団発生と高齢者の結核患者数の減り方の鈍化が問題となっている。結核はとかく過去の病気と思われるがちであるが、今まで述べたような歴史を含めて結核について正しい知識を持ち、「結核はまだまだ生きている」という認識を深めていただけたら幸いである。

(内藤記念くすり博物館学芸員)

- 参考文献：島尾忠男著『結核対策』
：石原修著『女工の衛生学的観察』
：岩崎龍郎著『日本の結核』
：石原修著『女工と結核』
：岡西順二郎著『結核の歴史年表』

第15回東海三県博物館協会交流研修会報告

観光地の中での博物館 — 観光施設化の功罪 —

平成2年度の東海三県博物館協会交流研修会が、10月4日(木)～5日(金)の両日にわたって、愛知県美浜町の知多美浜簡易保険保養センターを主会場に開催された。

1. 研修会

70余名の参加者が集う中、標記のテーマについて研修を深め、充実したときを過ごすことができた。

第1日目の研修会は、
愛知県博物館協会会長 亀井誠治氏
(愛知県陶磁器資料館館長) 亀井誠治氏の挨拶、常滑市教育長 竹内鉄英氏の祝辞をいただいた後、日本福祉大学教授 福岡猛志氏の基調講演を拝聴した。引き続いて、研究協議会では、三重県の御木本真珠島学芸課長 松月清郎氏、岐阜県の飛騨民俗村学芸員 小山司氏、愛知県の名古屋海洋博物館嘱託 平澤康男氏の貴重な事例発表がなされた。それぞれ「観光地の中の博物館」として、日常の活動とその留意点、今後の在り方について熱心に発表され、会員との意見交換もなされ、有意義な研究協議会であった。終わりに、次回開催県を代表して、岐阜県博物館協会副会長(岐阜県博物館館長) 伊藤秀幸氏の挨拶が行われ第1日目を終了した。



〈挨拶する
亀井誠治氏〉



〈挨拶する伊藤秀幸氏〉

第2日目は、2台のバスに分乗して、INAX窯のある広場資料館、やきものの散歩道と、国盛・酒の文化館を見学した。

「窯のある広場資料館」は、日本六古窯の地として有名な常滑市にあり、レンガ造りの煙突、窯とそれを覆う建物が、往時の姿を出来る限りそのままに保存した施設である。内部には、この地方で焼かれた洋風建築の黎明期のビルを飾ったテラコッタ(陶製フリルやアクセサリー)や製作用具が整然と数多く展示されていた。

「やきもの散歩道」は、同じく常滑市にあり、伝統ある窯業の文化が漂う実に快適なコースであった。

また、1844年に創業された国盛酒造の「酒の文化館」は半田市にあり、ここもかつての酒蔵をそのまま利用した施設であった。内部には、古い伝統的な日本酒の醸造工程を楽しく理解できるように、数多くの資料が注意深く配置されていた。さらに、この伝統を生かした現代酒造の様子を示す映像解説もなされており、楽しく・快適な一時を過ごすことができた。

貴重な資料とその展示方法、親切で分かりやすい解説、豊富な内容の講演、実践事例発表と意見交換、開催県事務局の方々の献身的な研修会運営、どれをとっても博物館人として、貴重な体験と学習を深めさせていただいた2日間であった。



〈窯のある広場資料館見学中の会員〉

以下、福岡猛志氏の基調講演の一端を紹介し、研修報告としたい。

2 基調講演

演題 「観光地における博物館・観光施設としての博物館」

(1) 観光ということについて

今日のテーマは、1963年に施行された「観光基本法」や近年制定された「リゾート法」に基づいて考えると、「行楽地における物見遊山と博物館」と言える。

さて、観光ということについて考えるに、①「出掛ける」ということ、②「戻って来る」ということ、③非経済的行為ということ、④レクリエーションということがあげられる。

(2) 観光客を主対象とした博物館

観光とは、日常性(場所・仕事・生活)からの、一時的離脱を伴うレクリエーション活動である。観光客が博物館を訪れるのは、偶発的・一過性の行為としての入館であることが多い。しかし、このことは、本来博物館が人々を引きつける魅力を持ち、地域の経済効果を引き上げ



〈入館者でにぎわう国盛・酒の文化館〉



〈講演中の
福岡猛志教授〉

る作用をもっていることを示している。

このため博物館は、国民に広く開かれ、経済効果を生み、地域を理解する遊びの場としての機能をもつことが望まれる。即ち、そこへ行くだけで楽しく、レクリエーションとし

ての遊びの中から自然に学習の動機づけができ、現地へ誘い込むような施設であって欲しい。また、博物館としては、二度目にはテーマをもって入館できるような、単にフィールドの解説者に留まらず本格的な博物館機能をもった博物館として、文化・自然の保護・保全を考えさせるような在り方が、ますます重要になると考える。

(3) 博物館の在り方について

すべての博物館は、観光性をもっている。今日のレクリエーションの目的を「観光白書」よりみると、①くつろぎ、②知的刺激があげられる。この知的刺激は極めて多様であり、平均化すべきでない。人々は博物館に専門的にきちんと説明されていることを望んでいる。このことは、深い研究に基づく分かりやすい展示、子供と老人を大切にした展示ともいえる。たとえ偶発的・一過性の入館者であっても、博物館は入館者に「有意義であった。」と言わせる工夫を凝らし、積極的・日常の入館者へ転化するよう働きかけなければならない。さらには、前者の後者への再転化ということが博物館の日常的な活動の充実によって、実践されて行くことを望む。

今日の生涯学習の時代には、このような博物館の在り方が非常に大切だと思う。このことが、観光と地元の人々の生活の交わり、「出会い」の喜びに結び付き、外からやって来た人と地元の人が住みやすい博物館施設、即ち、Tour と Amenity, Benefit \supset Profit を大切にしたい博物館施設であることが望まれる。

第18回会員研修会報告

手づくり展示・解説パネル

第18回研修会は、下記の要領で実施した。

研修内容

展示物の補助器具としての立体鏡の作り方

解説パネルの作り方

- パネルへの紙ののりづけ
- 題字の書き方
- 解説文の書き方

指導者 岐阜県博物館員

参加者 20名

当日は小雨の降るあいにくの天気であったが、遠くは白川村や高山市など県下各地から多数の参加者を得て行われた。

午後1時より1時間、展示物の補助器具としての立体鏡の作り方について、岐阜県博物館の國光学芸員から解説があったあと、実際に器具の作製を行った。これは昨年度の第15回研修会の反省に、作業を伴った研修を企画して欲しいという要望を生かしてのことである。恐竜の足跡スライドの立体視を通して、立体写真の撮影の仕方、器具の作製、その応用について研修した。

つづいて、午後2時より1時間半、岐阜県博物館の大平学芸主事と青木解説員による、解説パネルの作り方についての指導があった。

その主な内容は次のとおりである。

看板に紙を貼るコツ



〈立体鏡の作製風景〉

紙に水でうすめたのりを刷毛でまんべんなくぬり、その後、紙全体が白く光るくらいになったら貼りはじめる。しわにならないように貼るには、よく紙に水分を含ませのぼしておき、看板の一方から大きい刷毛で、外側へ広げるように貼るとよい。

字の書き方

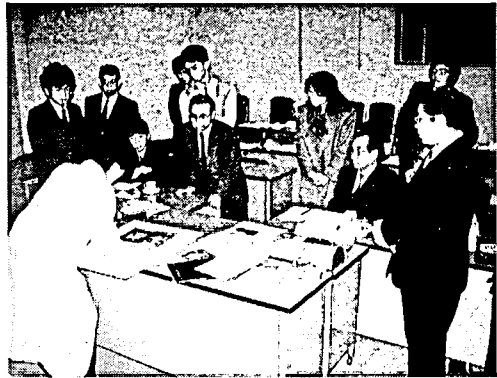
字は、筆で書く方法、字の輪郭を書きその中をぬりつぶす方法などがある。いずれの場合も書く手に手袋（指先を切り取ったもの）をはめると滑りやすく、線なども波うたない。

書かれた字は、横線がまっすぐになっていると上手に見えるので、定規やカラス口を用いて書くとよい。

筆はゴチック筆が書きやすい。絵の具はターナー色彩KKのネオカラーが重ね塗りをしてもむらにならない。マジックは、ポスカやピグマックス等が書きやすい。

最近、ワープロの文字が拡大しても見やすくなったので用いるとよい。タック紙にコピーしたり、インクリボンに赤・青などに換えて打ち出すといろいろ工夫した看板やキャプションなどを作ることができる。

研修後、来年度の研修に古文書等の表装についてやって欲しいとの意見が出された。適当な指導者がおられたら係まで連絡ください。



〈解説パネルの作り方解説風景〉

第46回 公開講座報告

日本の仏像の魅力

と き 平成2年10月28日
ところ 岐阜県博物館
講 師 成城短期大学学長
清水 眞澄氏

本年度第3回公開講座は、岐阜県博物館のご協力により、同館で開催された特別展「濃飛の仏像」の特別展講演会をそれに当てさせていただくという形で実施した。

講師の清水先生は、我が国の仏像彫刻研究の第一人者であるということもあって前評判も高く、当日の参加者も加えて312名と、会場の講堂は立錫の余地もない状況であった。

講演の終了後、県博物館課長補佐 川瀬善忠先生の懇切丁寧な解説で特別展を見学し、16時30分に講座を終了した。

☆ 清水先生の講演要旨

1. はじめに

30年前に東北大学東洋芸術史学科を卒業してから今日までに経験した不思議な仏縁について2～3紹介し本題に入りたい。

- (1) 神奈川県の山梨県境に近い道志川の辺に顕鏡寺という寺があり、その寺の調査に赴いた時倒れていた仏像の背後に「土州金剛頂寺」と書かれていた。金剛頂寺は翌日調査に訪れ



る予定の土佐の寺であった。

- (2) 土佐の金剛頂寺には、真言八祖といわれる僧侶のレリーフがある。鎌倉時代の定審という仏師の作になるもので、今岐阜県神戸町の勧学院で明らかになった釈迦如来像も定審の作であり、私と岐阜県との関わりが一層深くなった。
- (3) 私の卒業論文は鎌倉の清浄泉寺の大仏についてであるが、今回の仏像展に關係して新長谷寺の釈迦如来像の体内銘に「清浄泉寺」の文字があり、これまた岐阜との因縁を感じる。

2. 仏像の魅力について

仏像の魅力は、その姿、形をみて鑑賞する。仏像は本来信仰の対象であるから、美しくみるというよりも拝む、信仰してこそ意味がある。だから、調査を行う場合には魂を抜く儀式を行ってから調査をしている。

仏像の魅力への迫り方には、姿、形の全体について鑑賞する方法と、その造り方や作者、他の像との比較等から迫る方法がある。

(1) 仏像の美的な鑑賞について

自分の目で多くの仏像をみて、その印象を大切にすることが基本であること。著名な人の著書等によって勉強することは大切であるが、それに引っ張られないようにすることである。

日本の仏像は、一定の形があってその規定の中で制作されている。作者はその規定内で信仰の対象として表現しているから、全体の印象を一番大切にする。その後細部について鑑賞していく方法が望ましい。

仏像は立体であるので、角度によって非常に表情が異なる。また光の陰影によって表情が変る。ふわっとした明りの中で仏像を鑑賞するとまるで生き物のように表情が変化する。



(2) 仏像の形について

仏像が制作されるようになったのは今から2千年程前であり、仏教はそれから5百年程前に始まっている。仏像が造られる以前は、仏教のシンボリックなものとして樹木とか法輪等を象徴的に信仰の対象としていた。最古の仏像はパキスタンのガンダーラ地方、アトックという所のやや北西から香炉が発見されており、それに仏像らしきものが彫刻されている。それから5百年程たって日本に仏教が伝えられ、更に5百年たつと平安時代で、藤原氏による平等院鳳凰堂ができた頃になる。そして更に5百年たつと室町時代の末になって仏像彫刻としては衰退期に入る。5百年単位でみてみると非常に分かりやすい。

仏像はパキスタンのガンダーラ地方と北インドのマツールという所ではほぼ同時期に造られ始めるが、その容姿は現地の人々の姿を基本にしている。当初の仏頭の髪はウェーブがかかっており、根本で縛っている形になっている。それが後になって如来を示す形の一つとなる肉髻にっけいとなり、髪も螺髪らっぽという渦をまいた形となる。

我が国に仏教が伝来し信仰され始めた頃の仏像は、基本的な形はあったが細部まで定まっていなかった。規則的な仏像が造られてくるのは奈良時代の末頃からであり、それ以前の古い仏像の中には、仏像の形に当てはまらないものがある。また、大日如来、不動明王等の密教系の仏像は、平安時代になって密教が中国から伝えられてからのものである。仏教は多神教であるから数多くの仏を信仰することになり、仏の位

置関係や相互関係が生まれ、曼陀羅まんだらができ、その結果如来、菩薩、明王、天の部門に分かれて仏像の種類も非常に多くなっていく。

仏像には例外があるということである。例えば如来は冠や飾りを付けないが、宝冠をかぶった釈迦如来や阿弥陀如来がある。また、印相が逆になっている阿弥陀如来像もある。ある程度基本を押えておいて、それからいろいろな角度からどうしてなのかを調べてみると、仏像に対する興味が一段と増えていくことになる。

(3) 如来について

如来の形は32あるといわれている。細かく分けると80あると經典の中にてでくる。表に見えているところ、例えば肉髻にっけい、白毫相などは表現できるが、仏は歯が雪のように白ということになっていて、これは表現できない。ところが少ない例で歯拭き阿弥陀というのが鎌倉時代からあって、仏の本来の姿を表わしたものである。つい最近も小田原の本誓寺にこの仏像があるということで調査をした。X線で見ると歯の部分黒く出ており、骨か角で歯を作って入れている珍しい例だと思う。また、舌はやわらかく出すと顔を覆うほど大きい。手は長いといわれている。確かに立像を見てみると我々の手より長く造ってある。像全体のバランスがとってあるので一見したところおかしくない。このように、如来は32の規定に従って造られている。

(4) 髪の毛に注目した見方



仏は様々な髪の色をしているが、初期のガンダーラ地方の像はウェーブをしていて下の方で縛っている。菩薩は複雑な飾りを着けていたりする。仏頭は肉髻相、白毫相、螺髪等から仏の種類を見分ける位置でもあるので注目する箇所である。髪の色は群青色とされている。

菩薩になると髪の色を結うが、どのように結うかは卒業論文が書けるほど複雑である。基本的には上と下で締めて横に垂らす又は後ろに垂らす。展示されている浄土寺の観音像の頭は横で髪を捲いている特殊な形である。例外は大日如来像で菩薩と同じ形をしている。

菩薩の頭の形によって時代が分かる。奈良～平安時代初めは太く大きい大振りの髻を結っている。藤原の中期頃からだんだんと低くなってくるが、鎌倉時代になると奈良時代を模して再び大きく造るようになる。また、中国の宋、元代の仏画を手本として造る影響から、飾りが多くなり細くて高い髻がでてくる。このように菩薩の髻は時代を表わしている。例外として菩薩の中で髪のないのは地藏菩薩と聖僧文殊菩薩である。

不動明王の髪の色は、捲髪と捲き毛にしない総髪との2種類あり、左の肩に弁髪にして片側に垂らしている。また、経典の違いによって莎髻^{さい}とって七つの花の形を造って頭に飾りをつける像と、頂蓮^{ていれん}とって蓮の花を一輪のせる像とがある。その他の明王や十二神将は炎髪、怒

髪とって髪の色が逆立っている。

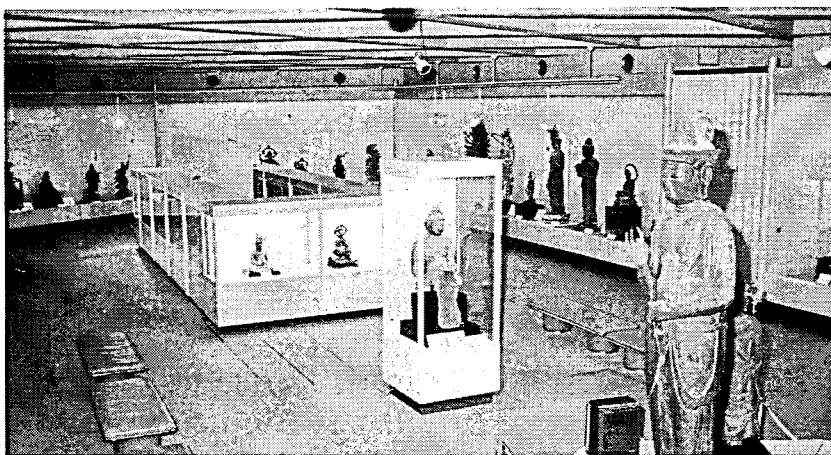
天のつく像はもともとヒンズー教の神々が仏教に取り入れられて仏として祀られるようになった。天の中には、仁王、四天王、十二神将のように伽藍や仏を守護する像も含まれる。一般には甲冑を着て武器を取って守るのであるが、中には、弁財天、吉祥天のように女性の仏で当時の髪の色をしている像もある。

特殊な例として、京都嵯峨野の清涼寺にある釈迦如来像は、髪の色が螺髪でなくて縄を捲いたようになっている。岐阜県では土岐市の崇禅寺の釈迦が同じ様式になっている。この清涼寺の釈迦如来像は、三国伝来の像といわれる。インドにある仏像を模刻したものが中国にあり、それを更に模刻して日本に持って帰ったものだからである。中国の唐時代の末から五代時代頃まで縄を捲いたような髪の色をしている仏像が数多く造られた。今でも龍門の石窟にはこのような像が多く見られる。

もう一つの特殊な例として阿弥陀様の中に髪の色がぼうぼうとしている像がある。東大寺には2体あるが、これを五劫思惟^{ごこうしゆい}の阿弥陀如来という。「劫」というのは気の遠くなるような非常に長い年数のことをいい表わしており、長い年月修行を積んで如来となられたために髪が伸びて、体よりも大きい髪の色を造る如来像がでてくる。

3. スライドによる仏像鑑賞

京都、奈良の仏像を中心にスライドを見ながら解説を加えていきたいと思う。
(以下略します。)



〈濃飛の仏像展示風景〉

≡≡≡ 県内ニュース ≡≡≡

◎第38回全国博物館大会終わる

平成2年度の大会が、10月26日・27日の両日、石川県金沢市の石川県社会教育センターを主会場として盛大に開かれました。

初日は開会式、表彰式、シンポジウムを、2日目は分科会、博物館視察、全体会議が行われ、参加者にとって意義深い2日間でした。

表彰式では、岐博協副会長 青木允夫氏も受賞されました。また、全体会議で次の2事項が満場一致で決議されました。

- I 博物館は、「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」の施行に鑑み、他の文化施設及び教育機関と緊密な連携を図り、特色ある積極的な活動を展開する。
- II 前項の活動を効果的に行うため、次の各項を国及び関係機関に対して要望する。
 - (1) 博物館法の改正
 - (2) 学芸員等の資質向上と処理の改善
 - (3) 税制
 - (㊦) 特定公益増進法人の認定の拡大
 - (㊧) 指定寄付の適用緩和
 - (㊨) 博物館の事業活動に必要な資料の購入・受贈に関する譲渡所得税等の免除
 - (4) 補助・助成
 - (㊩) 生涯学習を積極的に推進するために、博物館が行う収集・保管・調査・研究・展示・普及等に対する補助・助成の増額と新設
 - (㊪) 博物館情報ネットワークの構築、データベースの増強に対する補助・助成
 - (㊫) 私立博物館の振興のために、公立博物館と同様の補助・助成

◎東濃地区博物館等連絡協議会開催される

さる12月6日(木)御嵩町鬼岩公園内「ビューパレス」において東濃地区博物館等連絡協議会の定例会議が開催され、平成3年度の事業計画等の審議がなされました。

冬の鳥 ツグミ



代表的な冬鳥です。シベリア東部・カムチャツカ地域で繁殖し、10月下旬ごろ日本に渡ってきます。冬には人家近くにも来て地上の昆虫類や木の実を食べます。

この協議会は東濃地区の博物館等8館で構成され、毎年4月に総会、12月に定例会議がもたれています。岐阜県陶磁資料館に事務局が置かれ、伊左次義昭館長が協議会の会長を務められています。この会は会長のご尽力により、東濃地区の博物館等の連携、会員相互の親睦と博物館事業の振興を図ることを目的として年々充実した活動が展開されてきました。

この日の定例会は伊藤秀幸岐阜県博物館協会副会長も参加され、総勢21名でなごやかに進められました。伊左次会長から東濃以外の各地区にも協議会組織が確立されることを期待したいと挨拶があり、伊藤副会長からは、来年度10月に開催される東海三県博物館協会交流研修会が恵那市で開催されることから、この会への全面的な協力の要請がなされました。

懇親会では加藤よね子学芸員の名司会により参加者全員がカラオケで自慢の声を披露され、楽しい抽選会も企画され、会員相互の一層の親睦が図られました。

編集後記

第92号ができあがりました。お届けします。今年、7月に生涯学習振興法が施行され、生涯学習体制の幕明けを迎えました。博物館を取り巻く環境も大きく変わろうとしています。生涯学習との関わりの中でどう館・園を位置づけたらよいか、私たちが担う責務の重さを痛感し努力していかねばと思います。